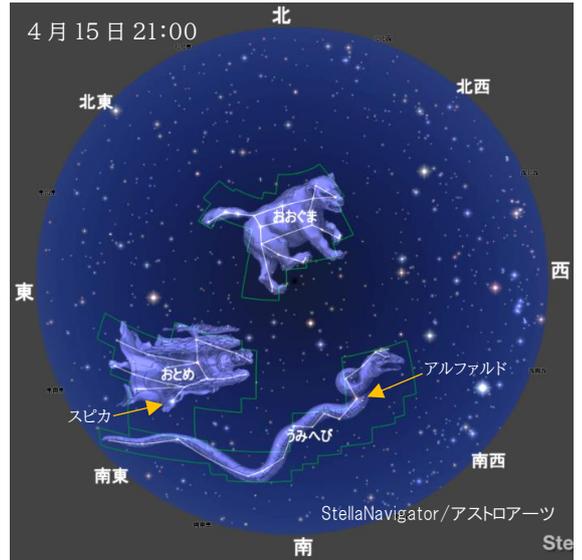


★今月の星もよう★

星座の大きさは境界線で囲まれたその面積で決まりますが、春の夜空には星座の大きさベスト3が出揃っています。全天一大きな星座はうみへび座。頭が西の空に差しかかる頃、ようやくしっぽが南東の空に昇ってきます。暗い星がほとんどですが、唯一アルファルドという赤い2等星が目立ちます。2位はおとめ座。黄道12星座の一つで、真珠色に輝く1等星スピカは、おとめ座の女神が手に持っている麦の穂先を表しています。そして3位はおおぐま座。大きなクマの姿を表した星座で、北の空の高いところに見えます。おおぐまのしっぽにあたる北斗七星は、ひしゃくの形に並んだ7つの星の並びで、北極星を探す手がかりとなっています。



★4月5日、月と火星が接近★

1月12日に地球に最接近した火星は、ふたご座に位置していますが、4月5日には、上弦の月が近づいて、1等星のポルクスと、月と火星とで小さな三角形を形作ります。肉眼でも目をひき、双眼鏡でも同一視野に見えます。7倍から10倍程度の双眼鏡で観察してみましょう。



★星の明るさ★

星の明るさは等級で表されますが、どのように決められているのでしょうか。

古代ギリシャの天文学者ヒッパルコス(紀元前2世紀)は、

- 1等星：最も明るい星
2等星：1等星よりも少し暗い星
3等星：さらに暗い星
...
6等星：肉眼で見える最も暗い星

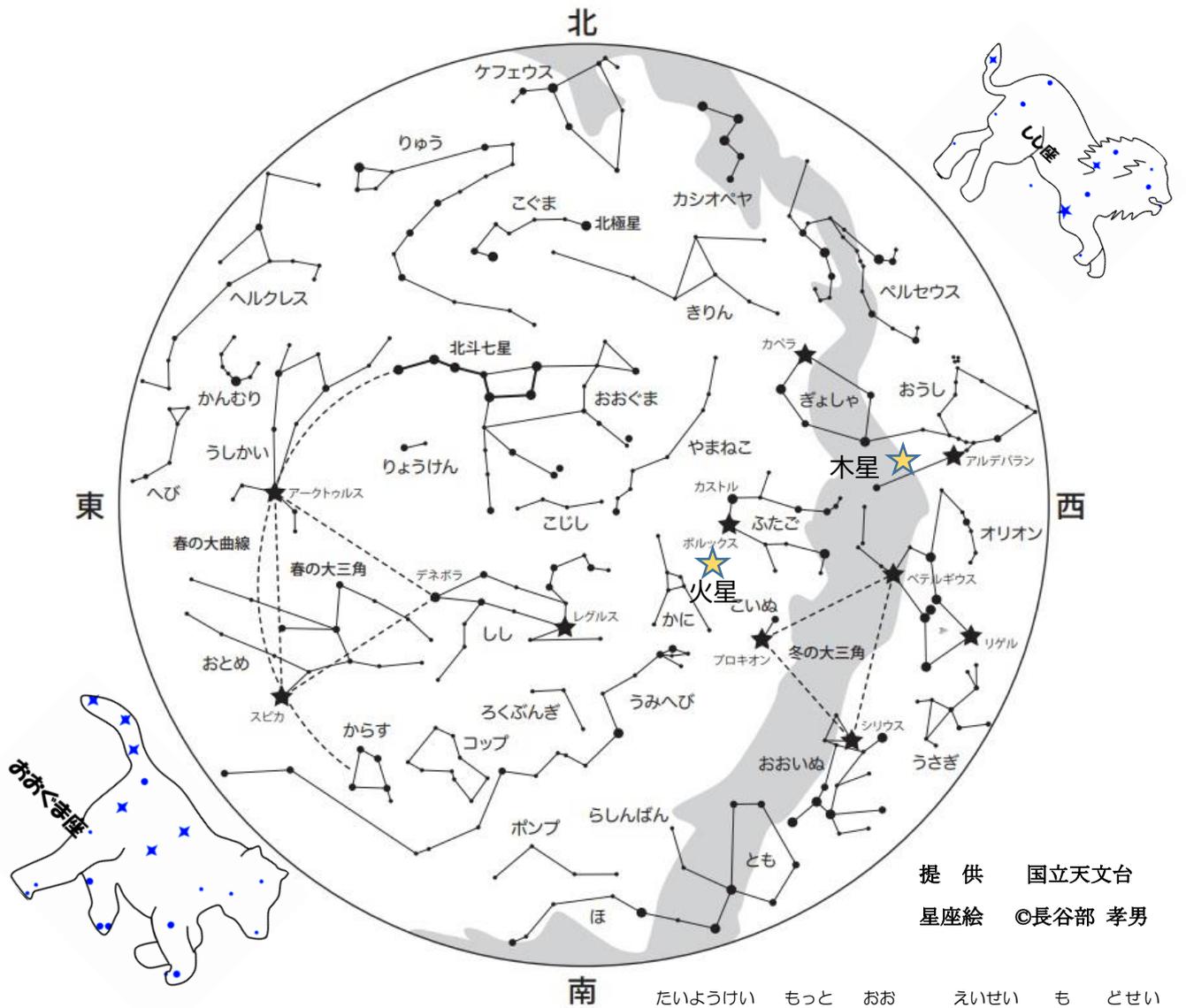


と星を6段階に分類しました。ヒッパルコスは肉眼で明るさを分類しましたが、19世紀以降、望遠鏡による観測や写真によって精密な測定が可能になりました。19世紀のイギリスの天文学者ジョン・ハーシェルが1等星の明るさは6等星の約100倍であることを発見し、同じくイギリスのポグソンによって、1等級差は約2.5倍明るさが異なると決められました。現代では、測光技術の進歩によって、マイナス数値や小数点以下の数値まで詳細に等級を表すことが可能になりました。例えば、おおいぬ座の1等星シリウスは - 1.46等です。肉眼で見えず望遠鏡で観測されるような暗い星は7等級以上の数値で表され、海王星は7.9等、冥王星は13.65等となります。ちなみに、これらの等級は地球から見たときの見かけの明るさであり、実際の明るさは「絶対等級」で表します。絶対等級については、次号以降で詳しく紹介させていただきます。

☆プラネタリウムの内容については、別刷りの「投影案内」をご覧ください

☆プラネタリウムのお休み 4/7(月)、14(月)、16(水)、21(月)、28(月)、30(水)

4月中旬 午後8時頃の星空



提供 国立天文台
星座絵 ©長谷部 孝男

太陽系で最も多くの衛星を持つ土星

1655年にオランダの天文学者ホイヘンスが自作の望遠鏡で土星の衛星タイタンを発見してから、カッシーニやハーシェルが主要衛星を発見しました。その後20世紀に土星を探索したボイジャー探査機や21世紀のカッシーニ探査機により次々と小型衛星が発見され、2025年4月の時点では274個の衛星が発見されています。観測技術の進歩によりその数は今後さらに増えていくと思われます。 出典：国立天文台 惑星の衛星数・衛星一覧

★ 4月の主な天文現象 ★

- 5日(土) ● 上弦
月と火星が接近
- 13日(日) ● 満月 ピンクムーン
本年最小の満月
- 21日(月) ● 下弦
- 25日(金) 明け方 月と金星と土星が三角形に並ぶ
- 27日(日) 明け方 金星が最大光度(-4.8等)
- 28日(月) ● 新月
- 29日(火) 明け方 金星と土星が最接近(7:36)

